



Title	大阪の屋根の下で : 在宅患者を考える
Author(s)	石田, 吉子
Citation	大阪公衆衛生. 1977, 37, p. 16-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪の屋根の下で

～在宅患者を考える～



石田吉子

51年4月10日、約37年間の大阪市における私の保健婦業務に終止符が打たれた。

そんな折、本誌の編集員の方から回想文を書くよう依頼があったので、微力ながら過去のいろいろなできごとをまとめてみようと考えたのであるが、あるひとつのできごとにより、急遽方向をかえたい衝動に駆られ上記の主題になった次第である。

あるひとつのできごととは、「在宅患者を考える会」(仮称)が関根二郎先生(大阪大学名誉教授)と中山信正先生(大阪市環境保健協会理事長)のご提言により、朝日新聞大阪厚生文化事業団の肝入りで発足し、7月27日第1回会合が催されて出席したことである。その席では「在宅看護事業は、将来どうしても行なうべきである」という前提のもとに、いろいろの話題がでたのであるが、いちばん私の心を捉えたのはつぎのことであった。

現在の保健婦活動は、種々の理由はあるだろうがいわゆる保健指導というきれいごとが殆んどで、地域の現状にあった継続訪問看護はなされていないのではないかと、困難な医療面を避けて通っているのではないだろうか、保健婦はもっと地区の看護問題、健康問題を述べるべきで地域看護の推進的役割を果たすのは保健婦以外にないということであった。

私はいままでの自分自身の怠慢を責められているような気持ちがするとともに、暑い日も寒い日も、黙々と受持地区を歩きまわり、かずかずの困難な問題に胸を痛めて東奔西走し

ている保健婦のだれかれを想い浮かべ、その保健婦たちが捉えている実態を端的に述べられない自分を齒痒くおもった。そこでこの際保健婦が継続訪問中の事例を遅ればせではあるが、集めてみようと思心に決めた。

8月に入って保健所訪問をこころみた。何よりも嬉しかったのは、保健婦係長、主査、婦長の諸姉が、継続事例の記録をつぎつぎと各保健婦から快く集め、一事例ごとに説明して下さったことであった。私は居ながらにして、その家庭を訪問し家人に接しているような錯覚に陥る程であった。

8月中に得たこれらの事例を、紙面の都合で一部にとどめ、各事例ごとのなりゆきは別の機会にゆずることにしてその概略を羅列してみた。

大別すると、「心身障害児をもったことから発したさまざまな問題」、「家族、親戚、近所の人からもみはなされて、心身の病気を併せもったひとりぐらしの老人の苦しみ」、「精神障害者を家族にもった家庭の困惑」などである。

そしてそのいずれもが声として出してくれる対象ではなく、諸調査からも洩れることが多く、せいぜいたどたどしい筆で受持保健婦にお礼の手紙がくる程度である。どの事例も医療のルートにのり看護技術の提供に至るまでには幾山河をのりこえていかなければならない現実があった。

＜事例の概略＞

1. 知恵遅れの未熟児がつぎつぎと生まれ、 ても全く無関心の父母

工場街、つづいて3人が未熟児で生まれ、知恵遅れ、歩行のおぼつかない幼児たち、そしてこの5月又第4子誕生、家族計画は勿論、育児の意識はうすく、何を話しても馬耳東風、さきを案じて母方の祖母が多忙のなかを時々手伝いにきている。

2. 隣人に殺されるとおもいこみ朝になると家を出歩く垢だらけのひとりぐらしの 老女

夫が入院中に死亡したことが理解できず、自分も隣人につれ出され殺されるとおびえて朝がくると外出する。夕方、帰えるまで雑多なものを拾ってきては室内につみあげ、鍵をかけている。入浴することなく垢だらけで近所から嫌われている老女。

3. 眼が不自由な兄、精神障害の弟、そして二人とも結核症、母と妹で一家を支えているが常に不穏な家の中

精神病院の入退院をくりかえしている25歳の男子。少し症状が落ちつくと家につれて帰る母親。そんな状態を快くおもわず、家に弟を入れまいとする両眼の不自由な兄。

兄弟とも結核であるが一進一退、母と妹が働いて一家を支えているが家庭の中はいつも不穏な空気がみちている。

4. 入院の必要な点頭てんかんの1才児を どうしても自宅で療養させたい母親

てんかんの適応薬を服用させるとぜんそくの発作がおこり吸引器が必要となる。こんなくすりあえしで、入院が必要であるといわれた過去の入院時に多額の費用を要したので何とか自宅で療養させたいと頑張っている。

母親はもと看護婦として勤務していたので自信をもっているようであるが大へんつかれ

ている。

5. 世間に知られたくない脳性小児麻痺の 児を生涯預ってくれるところをさがして ほしいと切望する母親

第4子として脳性小児麻痺の児が生まれたが上のこどもたちが成人した時の結婚問題におよぼす影響が心配で世間に知られたくない。障害児手帳の交付手続きもしないうえ殆んど外に出さない。できれば収容施設で生涯預かってほしいとつよく望んでいる。

6. 脳性小児麻痺と診断されたがどうしても も信じたくない父親

未熟児で出生した1年6カ月の幼児。脳性小児麻痺と診断されたが父親（少し知能がおくれている）はどうしても納得できず、母親は「心配なし」としてくれる施設をさがし歩き、あげくの果てには母子心中をころみたりした。

7. 開放性結核でうつ病併発、「死ぬ」と毎 夜家を出歩き家人を困らせている老女

結核発病後12～13年を経ているが好転せず入退院を半年ごとにくりかえしていた。

こどものことが心配という理由であったが、最近ではうつ病が加わり、神経科併設の内科へ通院しているが、毎夜半、死ぬ死ぬとつぶやきつつ家を出歩き、油断ができず、夫も息子たちもさがしまわる夜がつづき、しごとが手につかない。入院先もなかなかみつからない。

8. 小奇形と発達遅れをあわせもつ児と、
少し知恵遅れの母親をせっかんする父親
発達遅延といくつかの小奇形をあわせてもったこどもと少しおくれた母親に何度も乱暴を加え、全然働かない父親にたまりかね、何とか父を精神病院へ入院させてほしいと保健所に訴えにくる。

一方こどもの方も必要な検査を受けなければならないが、この母親ではうけ答えが無理である。保健婦は紹介した病院へ何度か同行している。母親は離婚してこどもを預けて働きたいと考えている。

9. 両眼の不自由なひとりぐらしの老女。

ある日突然の喀血でホーム・ヘルパーがきてくれなくなった。

一進一退の結核で眼も足腰も不自由であり、養子は長距離運転手のため4日に1回しか帰ってこないの、ホーム・ヘルパーにきてもらっているが、ある日突然喀血して以来、ホーム・ヘルパーはくるのを嫌がり、喀血したことを近所にいいふらしたと老女の耳に入った。老女も別のホーム・ヘルパーをと希望したがうまくいかずといい老女一人で放置もできないので養子は入院を考え本人に話したが全く拒否するし、主治医もきてくれず、困りはてて相談があった。

民生委員、保健婦、養子ともども話しあってようやく入院する気になった。しかし今度は両眼不自由で足腰不自由の結核患者をうけ入れてくれる病院はなかなか見当らない。

10. 半身不随でねている老人以外の家族は全員ろうあ

高血圧症として訪問してみると、左半身不随と言語障害でねたきりで、身のまわりの世話は嫁がしているがろうあで、病父と意志の疎通がうまくいかない。

何度か訪問し主治医と連絡、指示を得ながら手指の訓練をするうち、かなり動くようになり大へんよろこんでいた。ある日の訪問時、病人のようすが変わっており何かのどにつめたようすで意識もはっきりしないので、いきさつを聞こうとしたが、嫁の夫もろうあ者で筆談がうまくすすまず、病人はだんだん苦しそうになるので病人の友人をよんできてもらい、主治医に連絡のうえ救急車で入院させる。折よ

くもどってきた長女もその夫もろうあ者で筆談につぐ筆談であった。

11. 手足の爪が7cmものびた下半身不自由な姉と両眼全く不自由な妹のふたりぐらし

近所にねたきりの老人姉妹がいるが、家から悪臭がもれるので一度みに来てほしいと電話依頼あり。訪問してみると家の前はゴミの山、近隣の人たちが待ちきれず大まかな掃除をしたという。家のなかに入ってみると失禁でボロボロで、悪臭にみちた畳の上にふたりがゴロ寝していて、ハエが数匹とびまわっている。爪を切ってほしいというが、ふたりとも7cm余りものび、先が外又は内側に曲っている。ふたりとも自分たちはこの家で死にたい、入院など考えたことはないと常に近所の人に話していたようすである。

食事の世話は何とかするから排泄の世話と清掃にきてもらえぬかと切実な訴えが近所の人から出された。店屋ものの空き皿が乱雑につみあげられ、悪臭に輪をかけている。

12. てんかんの妻と2人の障害児の待つ家へ帰るのが面白くない夫

結婚後1カ月目に妻がてんかん発作をおこし夫は大へんおどろいたが、そのうち第1子第2子が生まれた。第1子は、ことばの発達おくれと先天性股関節脱臼で手遅れで、思春期に手術が必要であり、第2子も先天性股関節脱臼と痙れん発作をもっている。

妻は自分の受診もおぼつかず、こどもたちのことまでは手がのびない。夫は、商事会社の運転手でありまじめに働いているが、仕事のあと家に帰るのが嫌で帰ってもこどもたさにきつくあたり、第2子（6カ月）の早い目の手当の必要性を力説しても、多忙を理由にして放置している。

13. 脳性麻痺、結核、弱視、などの三子をもち、嫌になって家出した結核症の母親

母親の結核訪問をすると父は靴職人で健康であるが、三子とも上記のように疾病をもち、他に父親の兄の子二人が同居している、

母親は、時々実家に帰っていたが、最近家出し、未だに行方がわからない。こども達は必要な検査もうけていない。

まだまだ砂漠のように延々とつづくのであるが大阪の屋根の下、これらの人たちの苦悩が和らぐのは、いつの頃になるのであろうか。

(注) 「在宅患者を考える会」は3月9日の会合で「在宅看護をすすめる会」となりました。

(大阪市環境保健協会 石田吉子)

※この記事を読まれての、ご意見をおよせください。
編集部

おなじみの昆布 出しに お料理に

喜昆布



●喜昆布 500g入 1,400円

●喜昆布 250g入 750円

昆布は唯一の蛋白源として、母から子へと受けつがれた、家庭の味です。昆布にはヨード分や他にグルタミン酸ミネラルを豊富に含んでいる アルカリ性食品なので、酸性になりがちな血液を中和させ、栄養のバランスを整えてくれる健康食品です。

かみしめる自然の味 おやつ おつまみに

味こんぶ



●味こんぶ 100g入 300円

●味こんぶ 47g入 150円

新商品 / 味そふと たべかたいろいろ

味そふと



●味そふと 17g入 3袋つづり 200円

味そふとはいままでになかったソフトタッチのこんぶです。お使いやすい様に小分したパックです。いろいろの料理のお友だちとしてご家族でお楽しみください。

ふたば物産株式会社
吉田美智子